

自

分の生まれ育った、そして今も暮らす地をこんなに手放して褒め称える人に出会ったのは初めてかもしれない。Mさんと話していてそう思った。自慢話には違いないのだが、聞いているとほくほくとも不愉快でなく、まったくその通り、と素直にうなずけるのだった。Mさん宅に向かうまでずっと、ほれぼれする眺めが続いていたし、猛暑日なのが嘘みたいに、話している間中気持ちのよい風が吹いて、汗がひいていったからである。Mさんは、見てほしいと言って、十年以上前に撮った写真を持ってきた。家の前で撮ったものだという。

「これ、うちのおじいちゃん。」

写真全体がオレンジに光っているのは、中海が朝日を浴びているからで、シルエツトになっている小舟とおじいちゃんは、これから漁に出るところなのだ。奥に大きく大山が浮かんでいるから、まるで山に向かって舟を進めているように見える。

「写真下手だからね、どうしてもあの色が出んよ。」

きれいだなあ、と感嘆しているほかに、本物はこんなものじゃないってことだけは分かってほしい、とでも言うようにMさんは嘆いてみせた。実際その写真はわずかにピントがずれていたのだが、この湖で生きる

漁師の誇りや喜びまで写り込んでるように思えた。こんな光景とともに暮らしてきたのだから、言葉に尽くせぬのがもどかしくてならぬほど褒めたくなるのわかる。

もちろん、いいことばかりなはずはなく、困ったこともあるからぼくのところに依頼が入ったのだけだ。

となりの写真は、船小屋、波止、舟、干した網が中海、大山を背景にして写っていた。そして、吹雪いているみたいにカモメだかウミネコだかが写真全体に群れていた。驚いて聞いてみると、

「昔はいたんだよ、たくさんたくさんね。今はまったくいない。」

Mさんは言った。緊急車両を通すためという理由で、たつぷりと幅をとった護岸工事は今も伸び続け、船小屋も造船場のみ込んでしまっていた。

「やがて湖に下りられるところがなくなってしまうの。それだけはやめてほしいんだけどね。せめてここだけは。」

と、Mさんはさざ波が洗う石垣を見た。

Mさんの家では、おじいちゃんを最後に漁業を止めた。網はカラス除けになり、船着場は埋められて自動車も止まっている。Mさんが賛辞を惜しまぬ風物の半分は、もうその記憶の中にしかない。

専業ババ奮闘記 (その2) 112

木幡智恵美

秋 (1)

「治るの早！」息子がびっくりするほど、丸一日私を苦しめた副反応は、何事もなかったかのように消えた。これで、息子もワクチン接種の申し込みをしてくれればいいが。九月に入ってから、県内でも市内も二けたが続いているのだ。

雨が続き、少し涼しくなったかと思えば、また気温が三十度近くまで上がった。八月に蒔いたハクサイ、キャベツ、ブロッコリーの苗が大分大きく育ってきている。それらの苗を移植するところ、ダイコンの種を蒔くところを決め、九月に入ってから二度、草刈りと草除けに通った。夫におこしてもらった後、草の根を拾いながらダイコンの種を蒔いていく。作業をしながら、畑の雑草との付き合いを振り返ってみた。

最初に難儀に感じた相手はスギナ。この黒くて長い根が、地面の奥をどこまでも伸びている。おまけにその茎には弾力があり、途中で引つ張ろうものなら、プツンと切れてしまう。かといって、肘がはまるくらいまで掘っても続く根を一本一本抜いていく気力はない。一時期は畑の四分の一くらいまでスギナが広がっていた。

次に手こずったのはカヤ。地下茎をグングンのばして広がっていく。カヤの凄いは、芽の先が針のように尖っていて、ジャガイモなどを貫いてしまうところだ。地下茎を一掃したつもりでも、さらに深いところで縦横無尽にネットを張り巡らせているので、これも退治不可能。野菜を植えるところの上辺だけ退治し、あとは見ぬふりをしている。

そして、今手こずっているのがカヤツリグサ。ダイコンの種を蒔く際も、一センチくらいの黒い塊を幾千も土の中から除けた。塊は球根で、それが黒い糸のようなもので繋がっている。つまり、糸状の物を伸ばしてドンドン球根を増やしていくのだ。これだけ除いても、地中奥の方から白い芽を伸ばし、ダイコンが双葉を出す頃には緑のしゅつと尖った葉が周り中に生え、ダイコンの葉が十センチくらいになると、濃い緑で覆いつくしてしま

う、恐ろしき敵なのだ。今や畑の三分の一くらいにまで広がっている。そして、さらに新たな敵が畑全体に広がっている。これまでで最強の敵だ。刈ったところから幾本も枝を伸ばし、根は地中深くまで伸びていく。加えて武器まで備えているのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。予測困難な時代、不透明な時代と言われ、その度合はここ数年いつそう増しているように感じる。

新型コロナウイルスがここまで生活と経済の足引つ張ることをどれだけの人たちが予測していたか。ロシアがウクライナに攻め入り、その侵略戦争が半年以上にも及ぶと何人の専門家が考えていたか。まして安倍晋三が選挙演説中に凶弾に倒れることなどどれも想定していなかったはずだ。

年金生活者 長期的に見るなら、世界経済を覆っていたデフレ基調が急にインフレ基調に転換することを予測した専門家がどれだけいたか。中国がアメリカと張り合うほどの経済大国、軍事大国に成長すると覚悟していた政治家はどれだけいただろうか。

予測の困難さ、不透明化の最大の要因は、目に見えるものをもとに世界を理解するのが難しくなったことにある。唯物論が通用しない時代になったと言ってもいい。富の稀少性の上に成

り立つ唯物論は、資本主義の高度化が加速する稀少性の縮減の進行によって、その基盤を侵食されつつある。

その大規模な例が中国の「社会主義市場経済」だ。自由競争を原理とする資本主義経済と、自由を認めない一党独裁政治の組み合わせは、土台が上部構造を、言い換えれば経済システムが政治制度を規定するというマルクス主義の唯物論に反する。資本主義という土台の上にはブルジョワ的な自由と民主主義の政治体制が乗っかるはずだといのがマルクス主義の常識だった。

30代 何がそんなねじれを生んだんだ。

年金 高度化した資本主義、すなわち消費の過剰化、産業のソフト化、資本のグローバル化だ。それは民衆の自由を拡張した。消費の自由、職業選択の自由、移動の自由を広げた。それが独裁政権に奪われた自由を埋め合わせている。

マルクスの描いた近代国家の像はそうではなかった。人間は国家という「天上」と市民社会という「地上」と

の二重の生活を営むとした点は今の中国も同じだ。だが、人間が「他の人間を手段とみなし、自分自身をも手段にまでおとしめ、疎遠な諸力の遊び道具となつていく」（「ユダヤ人問題によって」城塚登訊）と彼が指摘したような過酷な市民社会は今の中国では消滅しないまでも後退し、民衆はある程度の自由を享受している。それが「天上」での自由や民主主義への欲求を削いでいる。

これは経済上の利害得失が人びとの行動を左右する度合いが低下したことを意味する。破壊と流血を代償にウクライナに攻め入るのも、それに大規模な経済制裁を科して返り血を浴びるのも、経済合理的な行動とは言えない。いま世界の人びとはマルクスの時代よりもはるかに経済のくびきから解放されていることをそれらは示している。

30代 確実に起きると予想されていることもある。「遠からず人口減少という巨大な氷山にぶつかる」（小沢一郎（事務所）のツイート）ことだ。

年金 国家の主要機能のひとつは富の再分配だ。人口減少、とりわけ生産年齢人口の減少は、分け合うパイを大きくするのを妨げる。

生産年齢人口の比率の多い国は、そうでない国に比べて国民の生活は豊かではない。しかし、今の日本のように少数の現役世代で多数の高齢者を養う負担を免れている。貧しいぶんだけ軍隊は貴重な就職先となり、兵の不足に悩むこともない。ロシアはそれに該当する。そうでなかったらウクライナ侵略にも踏み切れなかっただろう。

ウクライナがロシアに抵抗し続けることができているのも、両国の生産年齢人口の比率が近いことが支えている。ともに65%前後でほとんど差がない。それにくらべると日本は59%と小さい。

先進国はこの比率が低い傾向にある中で、アメリカは65%とロシア並みの高さを保っている。移民が比率を押し上げ、それがこの軍事大国を支え、アフガンやイラクでの戦争を可能

ニュース日記 844  
中村 礼治

## 不透明化する世界と巨大氷山

んな指摘をしている。

「若年人口が激減していてすでに半減、20年後にはさらに半減するのに、防衛費倍増して誰が戦車や戦闘機や軍艦に乗るのか」（「自民党の防衛力強化論は全くの空論…自衛隊の定員割れがこんなに酷い」、アゴラ、6月22日）

年金 防衛力の増強がもはや安全保障の基本戦略にはなり得ないことだ。

社会保障もこれまでのシステムを大幅に組み換えることを迫られている。生産年齢人口の減少が不可避なら、労働生産性を上げるしかない。それには絶えざるイノベーションが必須となる。それは政府がカネや口を出してできるものではなく、自由な市場の中でしか生まれえない。

そのために政府ができること、しなければならぬことは規制の撤廃あるいは緩和だ。それは他方で必ず格差を広げる。それを埋め合わせるために教育の無償化など再分配の強化が必要となる。岸田政権はそのどちらにもまだ踏み出していない。